

埼玉古墳群周辺の範囲確認調査

西 口 正 純

はじめに

史跡埼玉古墳群は、昭和13年に国指定史跡となりその後に平成元年の追加指定を経て、現在の指定面積は約22.3haである。またこの指定地を含む97haが古墳公園として都市計画決定を受け古墳公園となり整備が続けられている。しかし指定範囲は古墳群の展開から考えて、まだ十分なものとは言えない状況である。

埼玉県と行田市は共同提案として、平成19年に『世界遺産暫定一覧表記載資産候補提案書』を文化庁に提出した。それに伴って、埼玉古墳群のより正確な範囲が求められることとなったため、平成19年度から20年度にかけて、行田市と連携して埼玉古墳群の指定範囲周辺の試掘確認調査を行うこととなった。埼玉古墳群の立地的な環境を復元することと、古墳群の範囲を明確にすることは、史跡の追加指定に向けての根拠とするデータとなるものと思われる。今回はそのうち平成19年度に行った調査の結果を報告する。

埼玉古墳群の地理的環境

現在の埼玉古墳群は、水田地帯の中にあり一見平坦で台地と低地部の違いがわかりにくい。しかし本来は古墳群が立地する部分はローム台地である。埼玉古墳群周辺は、元荒川と古利根川などが乱流する地帯にあたり、これらの河川の開析により大宮台地本体と切り離され、南北に長い島状の台地を形成している。

埼玉古墳群を乗せるこの台地は、埼玉古墳群の形成当時の地形的な復元を行った杉崎氏によれば、「埼玉(サキタマ)台地」と仮称されている(杉崎 2004)。さらにこの地域に年間1mmの速度で下降するとされる「関東造盆地運動」(堀口 1981)が加わり妻沼低地、加須低地が形成されることとなる。このことを加味して考えると、現況は古墳時代から約1.5m低地化していることとなり、埼玉古墳群を乗せる台地の範囲は地理的な立地環境から、その範囲を限定することができるようである。

平成19年度の調査

調査は、平成20年3月12日から3月25日にかけて実施した。埼玉古墳群奥の山古墳南側からさきたま史跡の博物館西側の公有地化された部分の3地点にAからCのトレンチを設定し遺構・遺物の有無確認を行った。また、各トレンチを部分的に深堀し土層の堆積状態を観察記録した。

Aトレンチは、奥の山古墳前方部の西コーナー部分から約10メートル離れ、A1・A2の2地点で調査を行った。A1は、幅3m、長さ45m、A2は、幅1.6m、長さ2mである。ともに耕作土下20cm~30cmで硬くしまったローム層



Aトレンチ



Bトレーニチ

(立川ローム層Ⅳ層相当) が検出される。

現況は奥の山古墳との比高差が1メートルほどである。調査面の標高は、17.2mで現地表からローム面の標高が、約16.8mである。さらに60cmから75cm掘削すれば暗褐色土層となり、その下1m前後で、湧水面となる。遺構・遺物は検出できなかった。確認されたローム面の標高が16・8m前後で奥の山古墳周辺のローム面の標高が約18mであることから、1.2m前後の比高差が生じることとなる。Aトレーニチは、奥の山古墳外堀の範囲外にあたり奥の山古墳より西側で低地化することが確認された。

Bトレーニチは、Aトレーニチの80m北側に設定した。古墳群を乗せる台地側から、武藏水路にかけて1.6m幅で全長300mを、道路と水路をさけ間隔をあけて5地点調査した。B1トレーニチでは、ローム層が東端から西に向かって傾斜した状態で確認でき、最高部の標高が16.8m、最低部が15.8mとB1トレーニチ内でのローム面の比高差は東から西に向かって1mもあることが分かった。しかし、B2トレーニチからB3トレーニチにかけてはこのローム層が上昇しており、最高部では標高16.7mであった。この状況からローム層はB1・B2トレーニチの間でもっとも深くなるものと推定される。奥の山古墳付近のローム面と比べて、1.3m以上下がることとなる。なお、ローム層以下の堆積状況は、堅くしまった灰褐色土・暗褐色土が続き湧水点となっている。Aトレーニチ第2層で見られたように、ローム層が認められるが、鉄分の凝集が見られ、長期にわたり帶水する環境であったことが推測される。この状態はB4トレーニチ東側まで認められた。

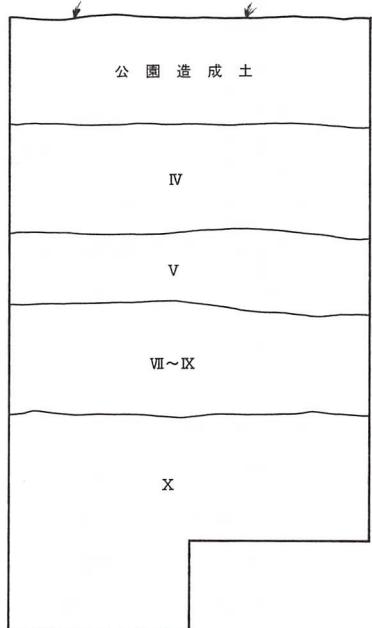
一方B5トレーニチでは、埼玉古墳群内で確認できる良好なローム層を検出した。この地点の標高は、16.8mでB3トレーニチの最も高い地点とほぼ同じである。このことから、Bトレーニチ地点の状況は、B1トレーニチからB2トレーニチに向かって地形が傾斜し、一旦B3トレーニチで高まり、さらにB4トレーニチで再度深くなりB5トレーニチ西端に向かって高まり、良好なロームが検出できる。

またB4トレーニチ西端では、耕作土下に粒子の細かい砂層と鉄分を多く含むオレンジ色の砂質土が見られることから、流路があったことが想定された。

遺構は、良好なローム面が検出できたB5トレーニチ西端に、幅1.7m、深さ90cmの溝1条が検出されている。溝から縄文土器数片が出



Cトレーニチ



第1図 奥の山古墳基本土層図



基本土層断面

IV ローム層
V 暗褐色土 第一黒色土
VI~IX 黒褐色土 第2黒色土
X 灰褐色土 シルト層

土したが、覆土が柔らかく以降の時期は近世以降と判断した。

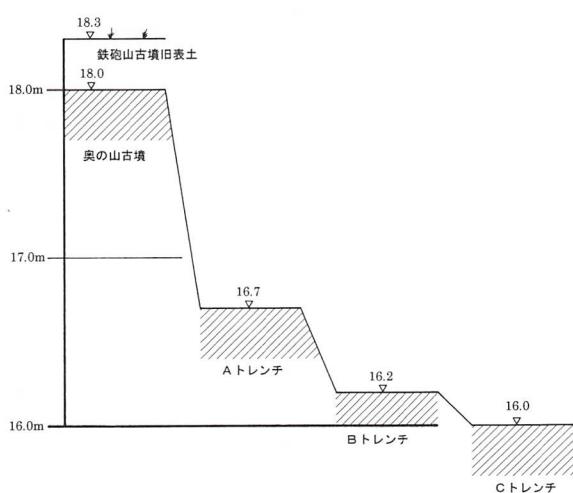
Cトレーニチは、Bトレーニチの北約200mで幅1・6m総延長130mの調査を行った。地表下30cm以下は、C1からC6にかけていずれも灰褐色・黒褐色・黄褐色・青褐色の粘土層となり、ローム層は検出できなかった。

C2トレーニチでは、地表下1.6m(標高

15.6m)で、泥炭状の黒色有機質土が検出され、C4~6トレーニチでは、地表下1.1~1.2mでローム層に相当すると考えられる灰褐色土層があり、標高が約16mである。土層の状態は、長期に帶水していた状況が推測された。さらにその下層は、Aトレーニチのローム層下で確認された、硬い暗褐色土と同じ層があり、立川ロームブラックバンドに相当するものと観察された。Cトレーニチ東側には、野合遺跡と佐間古墳群が形成されているので武藏水路近くで再度台地が出現し良好なローム層が確認されるものと予想される。遺構や遺物の出土はなかった。

まとめ

A・Bトレーニチでは、ローム層が確認できたが、Cトレーニチではまったく確認されなかった。ローム層の標高を比較すると、A1が最も高く標高17m前後で、Bトレーニチは中央でローム層が盛り上がり標高16.7m前後となる。また、Bトレーニチの東西はロームに相当する層は、低地化し50~70cm前後低くなる。Cトレーニチにいたっては、ローム層が確認されず、いっそうの低地化が進行する。一方ではAトレーニチ南に、陣場遺跡が所在するためローム台地が存在するものと予測される。



第2図 ローム層検出標高比較図

各トレーニチの地形変化は、耕作土層下まで耕地整理による削平が進んでいるため、地山ローム層で比較した。奥の山古墳古墳周辺では、地山ローム層は標高18mであるが、Aトレーニチでは16.7m、Bトレーニチ16.2m、Cトレーニチではローム層は検出されなかったので、それに相当する層で16mであった。このことで、埼玉古墳群を乗せる台地は各トレーニチの台地西側に向かって地形が傾斜し、さらにAからCの南方向とトレーニチに向かって地形が落ち込んでいることが分かった。Cトレーニチの知見は、現在拡張駐車場となっている部分の試掘の結果とも同じで、奥の山古墳と瓦塚古墳・愛宕山古墳・丸墓山古墳が埼玉古墳群の西の限界を形成していると考えられる。

Bトレントは西側で良好なローム層を検出しているが、現在の武藏水路下にかつて大人塚古墳(大人塚の位置については、杉崎氏の考証がある。杉崎 2006)があったことが知られており(高木 1936)、平安時代の野合遺跡が存在することからも地形が上がっていることが分かる。そうしてみると埼玉古墳群は旧表が最も高い中の山古墳周辺を頂点に西に傾斜して、今回調査した谷地形をはさみ現在の武藏水路付近で再度高くなることが推測される。また、丸墓山古墳の西側についてもCとレンチで見た知見が続くことから、旧忍川に向かってさらに傾斜していることが推測できる。旧忍川部分は低地化していたものと考えられ、さらに、忍川をはさんだ北側ではローム層が検出されていることから考えれば、古墳群の北側の限界を稻荷山古墳・丸墓山古墳と考えてよいものと思われる。

次年度の調査は、埼玉古墳群の北側から東側にかけてトレント調査を行う予定である。北側には白山古墳群が展開し、埼玉古墳群と同一とする考え方もあり(斎藤国夫 1994)、両古墳群の間に地形的な変換点が見出せるかが問題となる。東側については、現状では地形の変化を見出しにくくどこまでローム層が検出されるかが課題である。第3図で設定したトレント(D~M)については、予定の範囲であり、大半が民地となっている箇所であるため、行田市教育委員会協力を得ながら地権者の理解を求めて進める予定である。

その中で、JとKの2本のトレントの間には、地域で「シャンギリ山」(山宮山)と呼ばれる古墳跡と伝えられている場所が存在する(埼玉県教育委員会 1994)。現在は、住宅地となり「山王社」が祭られているが、地元の古老の話によれば昭和初期まで高まりが存在していたようである。現状でも周囲の畠と比べて一段高まりを持っており、住人の話では、部分的に地中に堅い場所が存在することが知られている。二子山古墳の東側にあたり、埼玉古墳群の範囲を考える場合に要検討の事例である。

平成19年度の調査は、行田市の全面的な協力で実施され、作業には当館職員中島 宏・井上尚明・石坂俊郎、行田市教育委員会中島洋一氏が当たった。

参考文献

- 埼玉県教育委員会 1994『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』
斎藤国夫 1994「V古墳分布の概要 7 北埼玉郡市」『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』
杉崎茂樹 2004「埼玉古墳群出現当時の地理的景観について」『調査研究報告』第17号 埼玉県立さきたま資料館
杉崎茂樹 2006「埼玉古墳群陣場地区所在の古墳についての覚書」『調査研究報告』第19号 県立さきたま資料館
高木豊三郎 1936『史蹟埼玉』埼玉村教育會
堀口萬吉 1981「関東中央部における沈降運動と低地の形成」『アーバンクボタ』No.19 株式会社クボタ



伝シャンギリヤマ古墳跡



A～C 平成19年度調査箇所

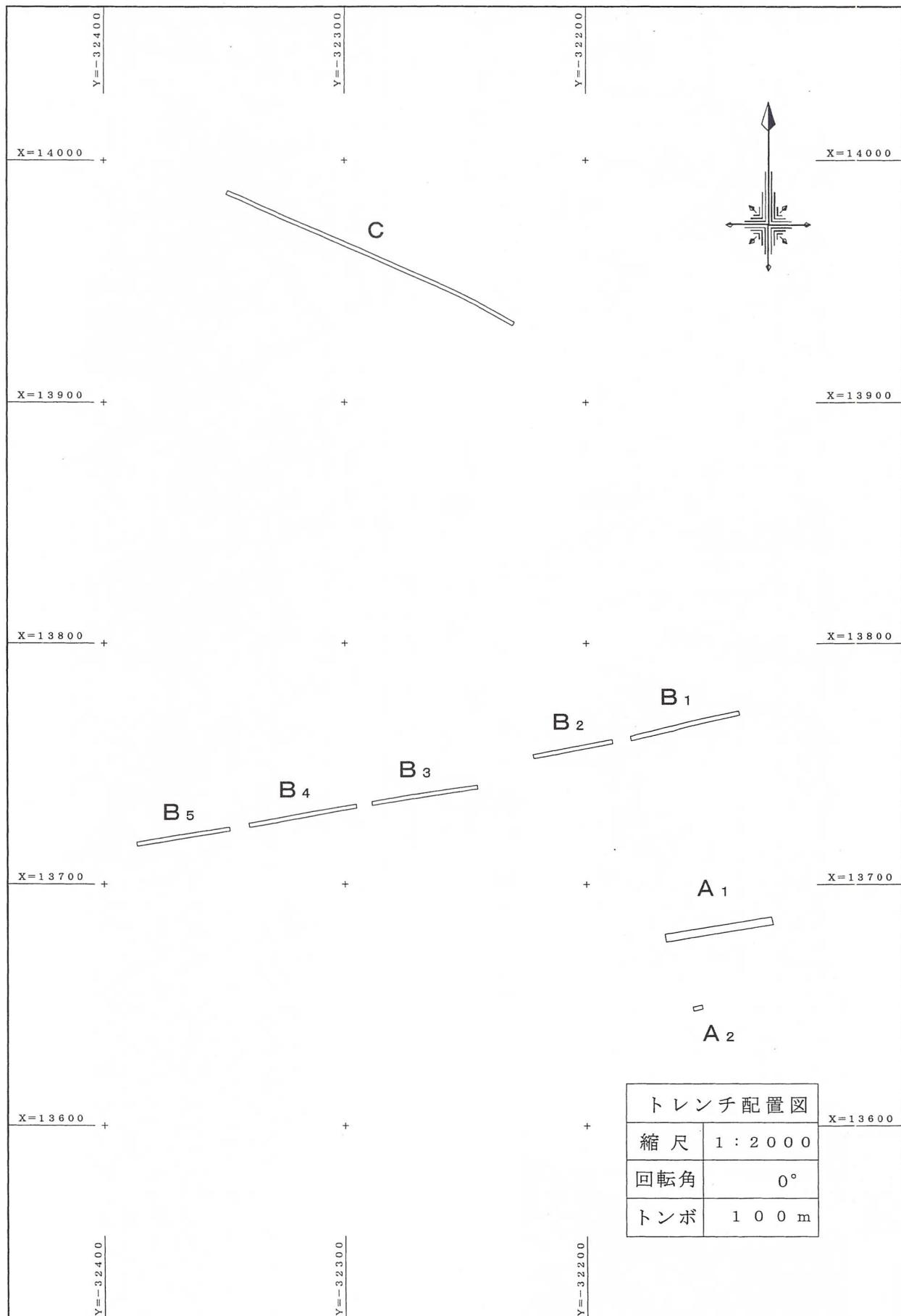
D～M 平成20年度調査候補箇所

○ 確認されている古墳跡

第3図 埼玉古墳群範囲確認トレンチ位置図



稲荷山古墳東側



第4図 範囲確認トレンチ配置図